
オレンジ色の空

蘭奇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレンジ色の空

【Nコード】

N1560M

【作者名】

蘭奇

【あらすじ】

*

嬉しいはずなのに、どうして??
こんなに迷ってしまうのは。

r a i n

姉上、

俺はただ姉上に幸せになつて欲しかった。

- - - - - 姉上に人並の幸せを - - - - -

僕は、

俺はどうすれば良いんですかい??

雨が降っていた。

天気予報は晴れだったのに。

突然の雨に備えのある者なんて当然居らず

皆、手や鞆で身を庇い雨の中を逃げるようにして走っていた。

その中で男が1人立っていた。

何をするでも無く。

ただ立っていた。

酷く虚ろな目をして突然降り出した雨を

恨めしそうに見る訳でも無く、歓迎する訳でも無く。

何を考えているのか分かりにくい表情をしていた。

何も考えてないのかも知れない。

それでも、男の背中はまだ哀しそうだった。

雨が降っている。

「今日も何も起きませんねい。」

「お前が望んでる様な事はそう滅多に起こらねーよ。」

沖田と土方はいつもの様に2人で市中見周りに来ていた。

何故、仲の悪い2人が頻繁に一緒に見周りをしているのかは分からないが。

「土方さん、俺あちよいと此処で昼寝、じゃ無くて仕事しとくんで先に帰つといてくたせえ。」

公園の前を通りかかった時沖田は少し前を歩いている土方の背中に向けてそう言った。

「そうか。」

いつもの土方には似つかわしくなく、それだけ言つと背中を向けたまま歩き出した。

数歩歩いてはたと立ち止りまだ背中を向けたまま、

「総悟、あんま一人で抱え込むなよ。」

、とそれだけ言つとまた歩を進めだした。

やはり普段の土方からは想像も出来ないような声音だった。

多分、本当に心配して言つてくれた言葉だろう。

それを聞いて沖田はさらに自分の心が揺らぐのを感じた。

しかし同時に心に浮き上がって来た負の念もしつかりと感じ取っていた。

土方は自分の弱さは絶対に人には見せない。
あいつ

その癖、人の心の迷いや怖気には人1倍気がつく。

あいつと居ると自分の心を見透かされている様で腹が立つ。

幼稚だと、自分でも思う。

いかにも小さいガキが考えそうな幼稚な事だ。

でも、ふと昨日の事を思い出してそんな事はどうでも良いと思えた。
自分が主導権を握っているみたいで、不覚にも胸がスツとするよう
な小気味よさを覚えた。

昨日の事 - - - - -

1目見て沖田は、その人物にあまり好印象を受けなかった。

背丈は精々10歳程度の子供くらいしか無く、全身真っ黒の喪服の
様な物に身を包んでいる。

顔立ちは凄く綺麗だった。

透き通るような真っ白な肌にスツと通った鼻筋。

茶色く円らな瞳はキラキラ輝いていた

しかし、沖田が好印象を受けなかった理由は表面的な外見を見たか
らではない。

円らな瞳の奥に子供らしからぬ何かを感じたからである。

はつきりとこれ、とは言えないのだが何か違和感を感じる。

そしてそれは、少女の口から飛び出した言葉によりはつきりと分かった。

「お兄ちゃん。人、殺した事有るでしょう。答えなくっても良いんだよ。全部知ってるから。これから私とゲームしない??」

全身の毛が逆立った様に感じた。

それと同時に沖田も気付いた事が有った。

……こいつは、人を殺した事が有る。

自分と同じ匂いをする。

血の匂い。

1人や2人殺^やっただけじゃこうはならない。

数え切れない程たくさんの人を命を奪ってきた、そんな匂いがした。

「お兄ちゃんの大事な人、居るでしょう?? 沖田ミツバさん、だっけかなあ?? その人の命と土方十四朗の命、交換しない?」

まるで、今日何処に行くかの相談をしているみたいな軽い口調だった。

さすがの沖田も久しく感じていなかった恐怖という感情を感じた。

でも、それと同じくらい目の前の少女が言った事は耳を疑うべき所が有った。

- - - 命を交換する。

「そんな事できる訳無えだろい。」

あえて平静を装おうとしたが、上手くいかなかったみたいだ。

声が自分でも分かるくらい震えている。

「できるよ。 何なら試してみる??」

少女は楽しそうに笑っていた。

でも、その笑顔は子供らしい無邪気なものでは無くて手に取るように殺気が感じられた。

無表情よりもよっぽど恐ろしかった。

「ま、良いよ。 期限は一週間。 一週間後の今日にまた此処に来て。 返事、楽しみにしてるよ。」

そう言うと、少女は立ち上がり笑いながら沖田に手を振った。

ボウツと少女の姿が霞み出しほんの数秒もしない内に夕暮れ時の街並みに溶け込んだ。

しばらく、その場から動けなかった。

今し方起こった、ほんの数分の事だろう。

でも、沖田には恐ろしく長いものに感じてなかった。

少女の言った言葉が頭にこびり付いて離れなかった。

ソプラノの抑揚の無い声が頭の中で永遠とリピートされている。

やがて沖田の心の内を表すかの様に、空が曇りだした。

雨滴が沖田の頬を濡らして落ちて行く。

・・・雨が降り出した。

But happiness common for an older sister.

Though I should have thought

- o
- .
-
Why?
?
?

a f t e r t h e r a i n

土方と別れた後、いつの間にか公園のベンチで眠ってしまっていたみたいだ。

はつきりと頬に跡が付いている。

夢を見た。

懐かしい夢を。

まだ武州に居た頃。

――まだ姉上が生きていた頃。

夢と言うよりはアルバムを捲っているみたいだった。

近藤さんと初めて会った時、

武州の頃からの道場の仲間、

4人でよく行っただうどん屋。

楽しい思い出のページだけを捲っていつている様だった。

夢の内容は鮮明に思い出せる。

でも、夢の終わりに姉上が言った言葉だけが何故か思い出せない。

楽しくて夢から覚めたくなかったのだが、急に姉が出てきて何かを
呟いてスウツと消えて行った。

何て言っただろう。

- - - 総ちゃん - - - - -

その後は???

その後は何て言っただろう。

- - - 思い出せない。

ただ1つだけ、覚えてる事がある。

それは姉の表情。

困った様な、まるで言う事を聞かない子供を目の前にした様な
いつも優しくかった姉お得意の笑顔だった。

小さかった頃は、よく姉を困らせてあんな顔をさせたものだ。

尤も、それは死ぬ間際にまで姉にさせていた顔だったのかも知れない。

でも、夢の中の姉の瞳に計り知れぬ哀しさを見た気がして。

それが故m姉が最後に言った言葉をどうしても思い出したかった。

記憶の奥に沈みそうなそれを、何とか手繰り寄せようと必死になっていた丁度その時。

あまり予想しなかった人物の登場により、記憶の旅は終了した。

「よお、総一郎君。珍しいじゃねえか、お前がそんな渋い顔してるなんてよ。 渋柿でも食ったのか?? ま、公務サボつてるとこはいつも通りだけどなっ税金泥棒。」

「総悟です。」

短く訂正だけしておいて、サボリや税金泥棒については触れようともしない沖田。

それに対しては突っ込もうとせずドカツと沖田の座っているベンチに腰を下ろし、探るような視線を沖田に向ける男。

老人のように真っ白な銀髪に死んだ魚の様な目つきという、あまり

にも異色を放つ風貌をしていた。

それなのに、その男には人を引き付ける何かしらの魅力を感じた。

「あんまこつちジロジロ見ないでくれやせんかい?? 変な気でも起こしたんですかい??」

そう言っても探るような鋭い視線を沖田から外そうとしない。

暫く沖田に視線を向けた後、何か考えるように宙に視線を泳がせたかと思うとまた沖田の方に視線を戻す。

数回それを繰り返した後、適切な言葉を今の考えに当てはめていく様にゆっくりと言葉を吐きだした。

「何か有ったのか??」

暫く考えた後の言葉にしてはあまりにも端的でストレートに疑問だけを並べた言葉だった。

沖田は暫したためらう素振りを見せた。

この男なら端から自分の話を馬鹿にする事はしないだろう。

だが、信じてくれる確証も無い。

重苦しい空気が2人の間を流れた。

暫くしてようやく沖田が重い口を開いた。

- - -

沖田は昨日の出来事なるべく事細かく話した。

銀時はその間一言も話に割って入らず静かに話を聞いてくれた。

沖田が最後まで話し終わると大きく確かめるように2、3度頷いた後

「それで?? お前は どうするんだ??」

、とだけ言った。

でも、この単純な質問が沖田を大いに困惑させた。

- - - どうするのか

それは昨日から何十回も自分自身に問い掛けてきた事だ。

未だにその答えは出ていない。

もし、姉上とあいつの命を交換する事を選んだとしたら。

姉上は果して喜んでくれるのだろうか。

自分は姉との再会を手放して喜べるだろうか。

無理に決まっている。

――それに、あいつも入っていたから。

あいつも、楽しい思い出の中に。

入っていたから。

銀時の質問の答えを網出せずにいる中突然、そう突然銀時がこう言った。

「おい、お前らそろそろ出てきたらどうだ?？」

その言葉に弾き出されるようにして近くの草陰の中から3人の人影が現れた。

その内2人は文字通り真っ青な顔を沖田の方に向けていた。

中でも山崎の顔には恐怖の色すら浮かんでいた。

普通ならこの中で一番恐怖の念を抱いている筈の土方は以外にも涼しい顔をしていた。

さすがの沖田も突然の3人の登場には驚きを隠せなかったが次の土方の言葉には度肝を抜かれた。

「本当に出来るんなら、俺とあいつの命、交換してくれ。」

rainbow

自分のへやだというのに沖田は落ち着かない様子でそわそわと辺りに視線を飛ばした。

その後、近藤の言葉で真選組の屯所に移動する事になった真選組＋銀時の5人。

重苦しい空気が部屋中を支配していた。

「副長、さっきの、本気なんですか??」

おずおずと言った感じで真っ先に口火を切ったのは山崎だった。

重苦しい空気が取り払われた訳では無かったが、沖田は胸をスツと撫で下ろしたくなるくらいだった。

「ああ。本気だ。」

それだけ言っと土方はフーと大きくため息をついて小さい声で語り出した。

「今まであいつの幸せを奪ってきたのは俺だ。

あいつを苦しめ

てきたのも。俺もこんな仕事してる以上、碌な死にかたしねえ事くらい分かってる。そんな命を罪滅ぼしの為に使えるってんならそのくらい、易しい事だ。」

沖田は体がカーッと熱くなるのを感じた。

何故かは分からないが口を突いて言葉が出てきた。

「何、格好付けてるんですか。だから気に食わねえってんだよ！
！ そんな事して姉上が喜ぶ筈無いつてことくらい分かってんだろ
！！ あんたが姉上の幸せを奪ってきた？？ 姉上を苦しめてきた
？？ 違う！！ 俺が、俺が！！」

そこまで一気に捲し立てると言葉に詰まり、頬を伝うものに気がつかない沖田。

それはどんどん溢れ出てきて畳にしみを作っていく。

近藤は尚も、俺が、俺がと、喚く沖田の肩をそつと抱き寄せて静かに涙を流していた。

土方は驚いて目を見開き、啞えていた煙草を危うく畳の上に落としかけた。

ただ1人銀時だけはこうなる事を予想していた様に温かい目で沖田を見守っていた。

でも、銀時でさえも気付いていなかった事があった。

部屋の外の庭で5人を見ている影がある事に。

「あああ、残念だなあ。　今回はいけると思っただのに。」

誰にも聞こえないくらいの純粹に残念そうな声。

「でも、ま良いか。　今回は面白いものも見れたしね。」

その影は思い直したようにそう呟くとボウッと霞んで見えなくなつた。

「総悟、本当に良かったのか?？」

あれ以来、初めての2人での市中見周りの際、自分の少し後ろを行く沖田に尋ねてみた。

「良かった訳ねえでしょ。　あああ、何で俺あんな勿体無い事しちやったのかなあ。　あんたを殺すまたとないチャンスだったのに。」

沖田は気付いていた。

いつもの様に少し前を歩く土方の口が微かに動いたのを。

「ありがとな。」

オレンジ色の空。

2つの影が形を変えて伸びていった。

r a i n b o w (後書き)

ここまで読んでくださってありがとうございます。

感想などいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1560m/>

オレンジ色の空

2010年10月10日01時45分発行